（省略）

まるで、時が止まったかのような一瞬の後。

大地が、樹々が、青空が、轟（とどろ）き、響き、割れる。

「じ、地震かっ」

三人は、地面に伏せ、揺れが収まるのを待つ。

だが、一向にその気配がない。

どんな大地震でも、これほど長い間揺れ続けることはあり得ない。

咲夜も、九条も常人の運動神経ではない。数秒の後には、その揺れにも対処する。

「お嬢様、ご無礼をお許しください」

そう言うと、咲夜は水丹を抱きかかえる。

「さ、咲夜。な、何をするの、お、下ろしなさい」

「いいえ、下ろしません。危険です。これは、ただの地震ではありません」

「わたくしなら、大丈夫ですっ」

叫ぶ水丹を無視する。

「まさか、『鍵』か。『滅び』が始まったのかっ」

九条の声が、悲痛に震える。

「咲夜、『鍵』の居場所が分からないかっ」

「どうして、『滅び』が……」

自分はつい先ほど、まだ余裕はあるはずと断じたのではなかったのか。何を間違えたのか。

やはり、昨日の晩に遭遇（そうぐう）した時に、命と引き替えにでも『鍵』を倒すべきだったのか。

過ぎたことを悔やんでも仕方がない。

いまは何をしても、この揺れを止めなくては。

その思いは、咲夜も九条も水丹も同じだ。

五感をさらに『改竄』する。

聴覚をもって、大気を震わす、その音源を探る。

触覚をもって、大地を揺がす、その根源を探る。

おおよその見当をつける。それほど遠くはない。だが、詳細

な地点までは分からない。
上空から探ることができれば……。
さしもの咲夜も、空を飛ぶことは叶わない。

「……本部から入電だ」
九条がポケットから小型の通信機を取り出す。
「おい、何を言っているっ。くそっ、雑音混じりでよく聞こえん。基地が、消える……だと。どういうことだ。おい、おい、もしもし、何が起きているんだっ。……おい、大丈夫かっ、……くそ、何も言わなくなった。いったい、なにがどうなっている」
「先生、ひとつ提案があります。この原因を探り、かつ今何が起きているかを同時に知る方法です」
折った樹の幹を、九条の『魔弾』で上空に向けて撃ち出す。
その幹には、咲夜が乗り、そして、一帯の様子を探る。

「落下の衝撃に耐えられるか？」
「頑張ります」
「とんだ安請け合いだな。だが、迷っている暇はないな。やってみよう」
「お嬢様、少しの間、我慢してください。太い樹にしがみつけば、きっと大丈夫です」
いまだ揺れ続ける地面に、水丹を下ろす。
「咲夜、気をつけなさいよ」
「はい、お嬢様。お任せ下さい。わたくしに怖いものなど、ありません」
「……猫が怖いくせに」
小さく笑った水丹の瞳に、咲夜は安堵する。

（以下、省略）